

戦争の歴史「慟哭の海」～住吉丸事件～から学ぶ人権学習



【徳島新聞1988年1月1日朝刊】

鳴門市 瀬戸中学校 知った「平和」と「人間愛」

古里の戦争体験学ぶ 聞き取った資料で授業

鳴門海峡の青いうねりと、山々の緑が見事に調和し、自然ののどかさが残る平和な町、鳴門市瀬戸町。こんな町にも太平洋戦争終戦直前の、消すに消せない悲惨な傷跡が残る。

昭和20年8月2日、特攻基地建設のため、旧宝塚海軍航空飛行予科練習生ら109人を乗せ撫養港から淡路港へ向かう機帆船が鳴門海峡を航行中、米軍機2機の銃撃を受けた。銃弾を浴び血まみれになった予科練生は急流に流され、うち約17人が瀬戸町島田島や北泊の人々に救助された。

この悲しい思い出も語り継がれることが少なく、時間の経過とともに風化しようとしている折、地元の瀬戸中学校(藤田牧雄校長)の3年生らが人命の尊さを知り、平和を願い、郷土を愛する心を培う意味などから救命体験を持つ町の古老から話を聞き、郷土資料「慟哭(どうこく)の海」としてまとめた。

授業では古老が涙ながらに話してくれた話を涙する生徒がいた。古老の脳裏に焼きつき決して忘れ去ることのできない約42年前の出来事は、生徒の心に命の尊さを重んじ、平和を願う気持ちとなって深く刻み込まれた。

郷土資料「慟哭の海」は、飯原清隆君(3年生)ら男女生徒4人と指導の森口健司教諭らが、昨年(1987年)9月21日、予科練生の救助に当たった同町大島田、無職大上猪之吉さん(87歳)を訪れ、体験談の聞き取りで始まった。

録音された大上さんの体験談は森口教諭らが400字詰め原稿用紙約4枚にまとめ、授業で感想を話し合った。その生徒の感想を拾ってみる。

※戦争を生き抜いた人は様々な経験をしたんだな、と思いました。人の命をいとも簡単に消してしまう戦争への怒りと、大上さんの勇気に感動しました。こんな人がわが町にいることを誇りに思います。

※平和な今でも、当時を思い出すと苦しさで涙を流す人がたくさんいると思います。一度残った心の傷はいやし切れず、大上さんのように何十年も怒りの涙を流し続ける人を2度とつくってはいけないと思います。

※自分の危険を顧みず、舟を出した勇氣ある行動は学ばなければと思います。物質的に豊かな今、大上さんのような優しさを失いつつあるように思えます。

※大上さんの涙を見て、42年も前の戦争がどんなにむごいものかわかりました。米機に狙われ、死にそうになったにもかかわらず、今でもその少年たちのために涙が流せるなんてなんと素晴らしいことなのでしょう。大上さんから人間の生き方について深く学んだような気がします。

※戦争の悲しみを追求することで、平和を愛する心が芽生えると思います。

※大上さんから学んだ事実を次の世代へ語り継いでいかなければならないと思いました。

語り合う準備は整う

戦争体験者、それも古里で起きた悲惨な体験談を読んで、瀬戸中学生は素直で、様々な感想を寄せている。そこに共通するのは、いずれも人間愛や平和の尊さ。平和に慣れ、たとえ中近東など世界各国で紛争が起こっても、直接利害に関係しない限り、“対岸の火事”に見がちな現代。目まぐるしく変化する社会情勢に人間愛が薄れる社会。「人間が人間らしく生き、人間らしく死ぬ」という何げない自然の摂理が守られなかった戦争を私たちはともすれば忘れがち。戦後半世紀を迎える今も、戦争体験者はまだまだ多く、平和の尊さを赤裸々に伝えることができる。また、若者の側にも受け継ぐ心の準備ができていようと思われる。

指導に当たった森口教諭も、「大上さんの抱えている戦争への怒りと優しさに触れ、瀬戸町に生まれ育つ生徒たちが大上さんの平和への願いを受け継ぎ、人間愛をかけがえのないものとしてこれからも追及したい。」と熱っぽく語っている。

こんなこと思った

教材手作りすばらしい

人間愛を考える授業に、古里にあった戦争体験談を子どもたちが手作りして教材に仕立てたことがまず素晴らしい。私も「慟哭の海」を読み、胸が熱くなる思いがした。子どもたちは、先人が残した人間愛、勇気、平和、命の大切さなどを学び語り継いでほしい。

多くの犠牲中学生世代

42年前、いまの中学生と同年代の仲間が多数戦争の犠牲となった。大上さんの話などから平和や人間愛の必要性を学んでほしい。1958年に島田島や北泊が救助地だとわかり、地元住民の救助活動をたてるため、昨年2月に顕彰碑建立実行委員会を発足させた。

大上さんへの聞き取りに参加した飯原清隆君の父親・清二さん

生き残り予科練生 山本玄歳男さん(加古川市在住)

9

私たちの郷土

郷土資料 (一) 慟哭の海

大上猪之吉

昭和二十年八月二日、ええ日和でした。あの日は、朝からまぜの風、土用の風が吹いていました。私は、牛の草を刈りに出ていました。この家より下がった、お宮のあるところですよ。ところが、しばらくしてから、空襲警報も、警戒警報もなしに「空襲！空襲！」という大きな声が、どこからともなく聞こえてきました。私は、あわててお宮の近くの林の中に走り込みました。その日は鳴門の方に敵機が襲来、鳴門海峡を抜けて低空飛行で爆撃してきました。

当時、鳴門海峡の浜には、たくさん松がありました。でっかい松で、今は松食い虫にやられていますが、むかしは淡路島が見えないほどたくさんありました。しばらくしてから鳴門海峡の方を見ると、その松の向こうから煙が見えました。「あっ！船がいかれとう。」と思いました。松の方に近づくと、アメリカの艦載機に小さい機帆船が攻撃されて沈みかけているのが見えました。

その機帆船は、壊れて海の上にいるのに陸の上にも積み上げたようになっています。しばらくすると、その船の周囲に黒いものが浮かんでいるのが見えました。「あっ！人間じゃ。」思わず声を上げました。それは機帆船に乗っていた兵隊でした。また、よく見ると、機帆船の上にも兵隊が何人か乗っているのが見えました。しかし、その兵隊たちは、みんな撃たれて傷を負っているようでした。また海に投げ出された兵隊たちも、潮の流れの中で浮いたり沈んだりしているだけのようでした。

その日は、日曜日だったのでいわし網のところにも男手が二人いました。私は、思わず大きな声で、「だれぞ助けに行ってくれ。」と叫びました。すると、一人が「あぶないことやめんか。」と言いました。私は、「わしらが助けに行ったら、一人でも二人でも助かるでないか。」と、必死に話をしました。私の顔の中には、以前山口県光市に徴用でいかされ、人間魚雷『回天』の製造にあたったとき、親切にしてくれた若い兵隊たちの顔が、幾度も浮かんで来て、今自分たちが助けなければという思いで必死に説得しました。二人は私の思いをわかってくれました。でもそのときは敵機がいつ飛んでくるかわからない状況でした。しかし、一人でも二人でも助けたいと思い、死に物ぐるいで舟を漕ぎ続けました。しばらくしてわかったのですが、その兵隊たちは少年(少年兵)でした。私は、「どうしてこんな子どもが、こんな目にあわなければならないのか。」という思いを噛みしめながら、必死に舟を漕ぎました。

また、後でわかったことですが、何人かの少年兵は、少尉の「淡路の方へ行け。」という命令で淡路島の方へ泳いでいったそうです。しかし、潮の流れが島田島の方へ流れていたため、いくら泳いでも淡路島の方へは行けませんでした。最後まで淡路島を目指したのでかえって遠くなりました。しかし、少年兵のほとんどは、潮の流れの中で西瓜のように浮いたり沈んだりしているだけのように見えました。

私たちは、流されている少年兵をありったけの力を振り絞って船の上に救いあげました。少年兵は、舟に救いあげた時は元気だったものもいましたが、すぐにぐったりとなり寝てしまいました。海の中にはまだまだ船べりの竹につかまっているだけの何人かの少年兵が浮かんでいます。水は8月だということにも冷たく感じました。少年だから軽いと思って引き上げましたが、とても重かったです。引き上げようとしたときの重さ、その冷たかった感触は今もはっきり覚えています。

海の中にはまだ何人かの少年兵が浮かんでいましたが、小さな舟には三人を乗せるのが精一杯でした。引き返そうとしたとき、仲間の一人が「グラマンじゃ！」と声をあげました。私は、一瞬、覚悟はしていませんでした。仲間の一人は聞き直して「あるもん飲んだり、食ったりせんだら損や。」とタバコを取り出しました。私はとっさに「グラマン！撃たんとてくれ！助けようじゃ！助けようじゃ！……」とわけがわからなくなるほど帽子を振って、精一杯の力で合図をしました。仲間二人も帽子を振りました。三人で腕がちらちらに帽子を振りました。しかし、グラマンは馬力を下げて低空ですぐそばまで飛んできました。もうだめかという気持ちになり、同時に帽子を振る手の力が抜けていくのがわかりました。そのとき、グラマンは高度を上げ北西の方向へ飛んでいきました。助かったと思った瞬間、三人とも舟の中で体の力が抜けました。その時の助かったという喜びは、四十年過ぎた今も鮮やかに心に刻まれています。

しばらくして、少年兵の一人が力なく目を開けて、「……」と聞きました。また「こんな日にあうとは思わなんだ」とつぶやきました。またもう一人の少年兵は潮の流れの痛みにうめきながら「お母さん、お母さん……」と涙を流しました。そんな少年兵たちは、まだ本当にあどけない中学生ぐらいの年頃でした。「どうしてこんな子供が……」と、胸の内から湧きだしてくる怒りを噛みしめながら、涙しや悲しさをこらえながら、無我夢中でやっとなら少年兵を引き上げました。

海の中にはまだ何人かの少年兵が浮かんでいましたが、小さな舟には三人を乗せるのが精一杯でした。引き返そうとしたとき、仲間の一人が「グラマンじゃ！」と声をあげました。私は、一瞬、覚悟はしていませんでした。仲間の一人は聞き直して「あるもん飲んだり、食ったりせんだら損や。」とタバコを取り出しました。私はとっさに「グラマン！撃たんとてくれ！助けようじゃ！助けようじゃ！……」とわけがわからなくなるほど帽子を振って、精一杯の力で合図をしました。仲間二人も帽子を振りました。三人で腕がちらちらに帽子を振りました。しかし、グラマンは馬力を下げて低空ですぐそばまで飛んできました。もうだめかという気持ちになり、同時に帽子を振る手の力が抜けていくのがわかりました。そのとき、グラマンは高度を上げ北西の方向へ飛んでいきました。助かったと思った瞬間、三人とも舟の中で体の力が抜けました。その時の助かったという喜びは、四十年過ぎた今も鮮やかに心に刻まれています。

しばらくして、少年兵の一人が力なく目を開けて、「……」と聞きました。また「こんな日にあうとは思わなんだ」とつぶやきました。またもう一人の少年兵は潮の流れの痛みにうめきながら「お母さん、お母さん……」と涙を流しました。そんな少年兵たちは、まだ本当にあどけない中学生ぐらいの年頃でした。「どうしてこんな子供が……」と、胸の内から湧きだしてくる怒りを噛みしめながら、涙しや悲しさをこらえながら、無我夢中でやっとなら少年兵を引き上げました。

海の中にはまだ何人かの少年兵が浮かんでいましたが、小さな舟には三人を乗せるのが精一杯でした。引き返そうとしたとき、仲間の一人が「グラマンじゃ！」と声をあげました。私は、一瞬、覚悟はしていませんでした。仲間の一人は聞き直して「あるもん飲んだり、食ったりせんだら損や。」とタバコを取り出しました。私はとっさに「グラマン！撃たんとてくれ！助けようじゃ！助けようじゃ！……」とわけがわからなくなるほど帽子を振って、精一杯の力で合図をしました。仲間二人も帽子を振りました。三人で腕がちらちらに帽子を振りました。しかし、グラマンは馬力を下げて低空ですぐそばまで飛んできました。もうだめかという気持ちになり、同時に帽子を振る手の力が抜けていくのがわかりました。そのとき、グラマンは高度を上げ北西の方向へ飛んでいきました。助かったと思った瞬間、三人とも舟の中で体の力が抜けました。その時の助かったという喜びは、四十年過ぎた今も鮮やかに心に刻まれています。

しばらくして、少年兵の一人が力なく目を開けて、「……」と聞きました。また「こんな日にあうとは思わなんだ」とつぶやきました。またもう一人の少年兵は潮の流れの痛みにうめきながら「お母さん、お母さん……」と涙を流しました。そんな少年兵たちは、まだ本当にあどけない中学生ぐらいの年頃でした。「どうしてこんな子供が……」と、胸の内から湧きだしてくる怒りを噛みしめながら、涙しや悲しさをこらえながら、無我夢中でやっとなら少年兵を引き上げました。

海の中にはまだ何人かの少年兵が浮かんでいましたが、小さな舟には三人を乗せるのが精一杯でした。引き返そうとしたとき、仲間の一人が「グラマンじゃ！」と声をあげました。私は、一瞬、覚悟はしていませんでした。仲間の一人は聞き直して「あるもん飲んだり、食ったりせんだら損や。」とタバコを取り出しました。私はとっさに「グラマン！撃たんとてくれ！助けようじゃ！助けようじゃ！……」とわけがわからなくなるほど帽子を振って、精一杯の力で合図をしました。仲間二人も帽子を振りました。三人で腕がちらちらに帽子を振りました。しかし、グラマンは馬力を下げて低空ですぐそばまで飛んできました。もうだめかという気持ちになり、同時に帽子を振る手の力が抜けていくのがわかりました。そのとき、グラマンは高度を上げ北西の方向へ飛んでいきました。助かったと思った瞬間、三人とも舟の中で体の力が抜けました。その時の助かったという喜びは、四十年過ぎた今も鮮やかに心に刻まれています。

郷土資料

慟哭の海

大上猪之吉 (おおうえいのきち)

昭和20年8月2日、ええ日和でした。あの日は、朝からまぜの風、土用の風が吹いていました。私は、牛の草を刈りに出ていました。この家より下がった、お宮のあるところですよ。ところが、しばらくしてから、空襲警報も、警戒警報もなしに「空襲！空襲！」という大きな声が、どこからともなく聞こえてきました。私は、あわててお宮の近くの林の中に走り込みました。その日は鳴門の方に敵機が襲来、鳴門海峡を抜けて低空飛行で爆撃してきました。

当時、鳴門海峡の浜には、たくさん松がありました。でっかい松で、今は松食い虫にやられていますが、むかしは淡路島が見えないほどたくさんありました。しばらくしてから鳴門海峡の方を見ると、その松の向こうから煙が見えました。「あっ！船がいかれとう。」と思いました。松の方に近づくと、アメリカの艦載機に小さい機帆船が攻撃されて沈みかけているのが見えました。

その機帆船は、壊れて海の上にいるのに陸の上にも積み上げたようになっています。しばらくすると、その船の周囲に黒いものが浮かんでいるのが見えました。「あっ！人間じゃ。」思わず声を上げました。それは機帆船に乗っていた兵隊でした。また、よく見ると、機帆船の上にも兵隊が何人か乗っているのが見えました。しかし、その兵隊たちは、みんな撃たれて傷を負っているようでした。また海に投げ出された兵隊たちも、潮の流れの中で浮いたり沈んだりしているだけのようでした。

その日は、日曜日だったのでいわし網のところにも男手が二人いました。私は、思わず大きな声で、「だれぞ助けに行ってくれ。」と叫びました。すると、一人が「あぶないことやめんか。」と言いました。

私は、「わしらが助けに行ったら、一人でも二人でも助かるでないか。」と、必死に話をしました。私の顔の中には、以前山口県光市に徴用でいかされ、人間魚雷『回天』の製造にあたったとき、親切にしてくれた若い兵隊たちの顔が、幾度も浮かんで来て、今自分たちが助けなければという思いで必死に説得しました。二人は私の思いをわかってくれました。でもそのときは敵機がいつ飛んでくるかわからない状況でした。しかし、一人でも二人でも助けたいと思い、死に物ぐるいで舟を漕ぎ続けました。しばらくしてわかったのですが、その兵隊たちは少年(少年兵)でした。私は、「どうしてこんな子どもが、こんな目にあわなければならないのか。」という思いを噛みしめながら、必死に舟を漕ぎました。

また、後でわかったことですが、何人かの少年兵は、少尉の「淡路の方へ行け。」という命令で淡路島の方へ泳いでいったそうです。しかし、潮の流れが島田島の方へ流れていたため、いくら泳いでも淡路島の方へは行けませんでした。最後まで淡路島を目指したのでかえって遠くなりました。しかし、少年兵のほとんどは、潮の流れの中で西瓜のように浮いたり沈んだりしているだけのように見えました。

私たちは、流されている少年兵をありったけの力を振り絞って船の上に救いあげました。少年兵は、舟に救いあげた時は元気だったものもいましたが、すぐにぐったりとなり寝てしまいました。海の中にはまだまだ船べりの竹につかまっているだけの何人かの少年兵が浮かんでいます。水は8月だということにも冷たく感じました。少年だから軽いと思って引き上げましたが、とても重かったです。引き上げようとしたときの重さ、その冷たかった感触は今もはっきり覚えています。

3人で必死で引き揚げましたが、なかなか舟に引き上げることができませんでした。引き上げるとすぐに少年兵はぐったりとなっていました。水をはいたら楽になるだろうと思ひ水をはかせました。奥歯を噛みしめながら、悔しさや悲しさをこらえながら、無我夢中でやっと3人の少年兵を引き上げました。海の中にはまだ何人かの少年兵が浮かんでいましたが、小さな舟には3人を乗せるのが精一杯でした。

引き返そうとしたとき、仲間の1人が「グラマンじゃ！」と声をあげました。私は、一瞬、覚悟はしていたけど、助けにきたことを後悔しました。仲間の1人は開き直って「あるもん飲んだり食ったりせなんだら損や。」とタバコを取り出しました。私はとっさに、「グラマン！撃たんといてくれ！助けよんじゃ！助けよんじゃ！……！」とわけがわからなくなるほど帽子を振って、精一杯の声で合図をしました。仲間2人も帽子を振りました。3人で腕がちぎれんばかりに帽子を振りました。グラマンは馬力を下げて低空ですぐそばまで飛んできました。もうだめだという気持ちになり、同時に帽子を振る手の力が抜けていくのがわかりました。その時、グラマンは高度を上げ北西の方向へ飛んでいきました。助かったと思った瞬間、3人とも舟の中で力が抜けました。その時の助かったという喜びは、40年過ぎた今も鮮やかに心に刻まれています。

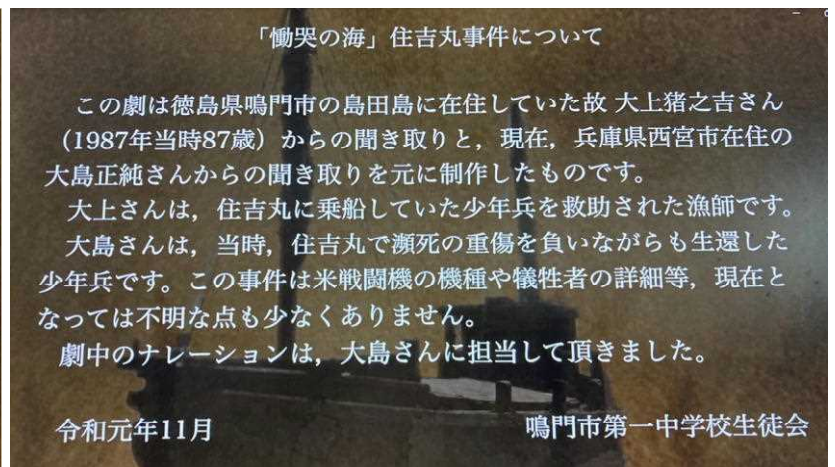
しばらくして、少年兵の1人が力なく目を開けて「ここどこ？」と聞きました。また「こんな目にあうとは思わなんだ。」とつぶやきました。またもう1人の少年兵は血の流れる傷の痛みとうめきながら、「お母さん、お母さん……」と涙を流しました。そんな少年兵たちは、まだ本当にあどけない中学生ぐらいの年頃でした。「どうしてこんな子どもが……」と胸の内から湧き出してくる怒りを噛みしめながら「陸(おか)に上がったら元気になるけんなあ」と少年3人を励ましながら島の方に向かいました。島からは、新たに大きな漁船が救助に近づいてくるのが見えました。

(1987年9月 徳島県鳴門市島田島在住の大上さん[当時87歳]より聞き書き)

学習の手引き

1. 私たちが住むすぐ近くが、戦場になっていたことについて考えてみよう。
2. 大上さんや仲間2人の勇気ある行動について考えてみよう。
3. 身近な人、近所に住んでいるおじいちゃんの中にこのような歴史があることについて考えてみよう。

2019年度鳴門市第一中学校 人権劇「慟哭の海」(シナリオ)



ナレーション(大島正純さん)

昭和20年、当時の私は14歳。日本で最後、そして最年少の軍人だったと思います。私は、この頃中国に住んでいました。当時は上海日本中学校の3年生でしたが、この地で日本国内で予科練習生の募集があることを知りました。

飛行機乗りになることに憧れていた私は、募集資格の年齢が下げられていたこともあり、早速志願し、受験に合格、家族と別れてすぐに日本に渡ることになりました。大戦末期の当時、海上は敵の攻撃を受けやすいとの判断があったので、ひたすら陸路を移動しました。

昭和20年5月、釜山港から船に乗り、やっとのことで九州の博多に到着したのです。そこは生まれて初めて踏みしめることになった祖国の日本でした。もともとの配属先は、茨城県の土浦海軍航空隊でしたが、到着後、土浦の基地は空襲を受けたことを知らされました。そのため、昭和20年6月15日宝塚海軍航空隊に配属されたのです。しかし、驚いたことに、宝塚の航空隊には、憧れの飛行機は1機も存在しませんでした。そもそも滑走路がありません。宝塚航空隊、そこは、宝塚少女歌劇団の劇場を海軍が接收した場所だったのです。

陸上での厳しい訓練に明け暮れた1ヶ月半の後、二百数十名ほどの私たち予科練習生は、鳴門要塞の補強工事を行うために宝塚を出発することになりました。大阪湾には米軍の機雷が配置されてしまっており、しかもまだ当時の淡路島は、陸路が余り整備されていません。

私たちは、岡山を経由して高松港に渡り、7月31日に撫養駅、現在の鳴門駅に到着しました。けれども到着した日には撫養港から淡路島へと渡る船が確保できなかったため、この町で2泊することになりました。

そして8月2日の朝、鳴門の撫養港から淡路島の阿那賀へと出発したのです。

1945年8月2日 朝 撫養港 (木造の砂利運搬船(機帆船)二隻が停泊している)



ナレーション(大島正純さん)

港では、私たちを35トンの砂利運搬船二隻が待っていました。いつもなら砂利を運ぶはずの船倉は空になっており、私たち予科練習生は詰め込めるだけ詰め込まれました。それぞれの船に100人以上乗船しなければならないからです。

住吉丸 甲板上 下士官2名の会話

下士官1

淡路島にはどれぐらいでつくかな。機帆船だから遅くなりそうだが……。

下士官2

まあ仕方がないだろう。上官から聞いた話じゃ、まっすぐ淡路島に向かわないで、いったんこの海峡添いに西へ回り込んでから北に移動するそうだ。東に向かえば大鳴門、こっちは小鳴門っていう名の海峡だ。遠回りにはなるんだが、小鳴門は島に囲まれた細い海峡だから、敵機からの攻撃は受けにくいらしい。

下士官1

そうか。直接淡路島に向かうのは危険ということなんだな。といっても結局は、淡路島まで渡ることになるんだろう。広い海で、敵機に見つかればまるっきり狙い撃ちじゃないか。真昼間からの移動っていうのはどうもなあ……。

下士官2

……。ところで俺たちの班の方が後から乗船したのに、こっちが先に出発するみたいだぞ。向こうの船は、どうやら調子が悪いみたいだ。



住吉丸 出航 その少し後、警戒警報が響き渡る
後続の機帆船 甲板上 下士官2名の会話

下士官1

いかん。今、出発するのは危険だ。一旦、出航待機とする。おい、先に出発した船には、この警報は届かないぞ。向こうに連絡する方法はないのか。

下士官2

無線の設備がありません。無理です。

下士官1

そうか……。まずいな……。

住吉丸 船倉

予科練1

暑いなあ。ここは窓がないから、ひどいもんだ。

予科練2

まあ、いまさら愚痴をいっても始まんよ。乗ってる間は、何もすることがないし。窮屈だけど休めるときに休んでおこう。おそらく向こうに着いたらすぐに土木作業になるだろうし。

大島

ああ、また力仕事だ。大変だろうなあ。

予科練2

おいおい、教練よりもか。

大島

ああ……。まあ、そうだろう。

ナレーション(大島正純さん)

船倉の中はひどく暑く、いつまでたっても到着する気配がありません。

予科練2

おい、もうそろそろ昼頃じゃないか

予科練4

船倉が満杯になったから甲板に何人かが残っただろう。ここよりは涼しいんじゃないか。

予科練1

いや。上には日かげがほとんどないしな。風がなければ、どっちもどっちって所じゃないか。

予科練5

ここでは窓がないから、自分たちがどの辺にいるのかも分からん。次の班は一緒に来てるのかな。

ナレーション(大島正純さん)

実は、私たちの船は阿那賀の港まであと少しという所まできていました。ところが……。



戦闘機二機が、海面上に小さく見える
戦闘機二機は、急速に住吉丸に接近する
住吉丸 甲板上 下士官2名の会話

下士官1

おい、あれは……。

下士官2

友軍機か？

下士官1

いや……違う。違うぞ。敵機だ。敵襲！！(大声で)

下士官2

いかん。ここじゃあ狙い撃ちだ。おい、すぐに海に飛び込め。

米軍機が最初の攻撃をしかけてくる

船上の士官、下士官は米軍機の銃弾によって撃たれ、倒れる

船倉の屋根が碎け散る

甲板から死体が船倉に落ちてくる

船倉内に叫び声が響き渡る



予科練1

おい……おい。……だめだ、死んでるぞ。

船倉内を突き抜ける敵機の弾丸は、仲間の体を貫き、そのまま船底を貫通

船底から水が吹き出てくる。仲間の血と重油、海水が船底で混じる

ナレーション(大島正純さん)

三度目の攻撃で、弾丸が私の右後頭部をえぐるようにかすめました。そして、そのまま意識を失ったのです。その時は、何か真つ白なもやが漂う空間を落ちていくような感じでした。ふと意識が戻った時は、すっかり体がしびれて痛みを感じなくなっていました。

眼前で船の機関部が燃えているのが見えますが、体が思うように動かず、消火を手伝うこともできません私は時々、ふっと意識が遠のくのを感じました。そうした中、米軍機が去っても、おそらく空耳だったのでしょうが、どこからともなく敵機の音が聞こえているように思えたのです。

予科練1

おい、大丈夫か。甲板に上がるんだ。

大島

だめだ。身体に力が入らない。

予科練1

何を言ってるんだ。ここにいたら敵の的になるだけだぞ。



ナレーション(大島正純さん)

船底から何とか這い出せたのは、おそらく私を含めて15名程でした。私は今度敵機がきたら海に飛び込もうと漠然と考えていました。船が襲撃された地点からは、淡路島の岸が見えたのですが、実際には潮の流れが速いため、泳いでたどり着くことはできなかったようです。海に飛び込んでいれば、鳴門海峡の潮流に流され体力が尽きて、生きてはいなかったと思います。



島田島 海岸 「空襲、空襲」

大上さん、松林に走り込み、いったん松の木の陰に隠れる
重なった松の木の幹の向こう側から、淡路島方面を眺めると
その向こうに煙が上がっているのが見える

大上

あの船が、攻撃されてるのか。



よく見ると、船の上にも人影が見える
機銃で撃たれて傷を負っているようだ

大上

……兵隊さんじゃないか……。



大上猪之吉
島田島の漁師 当時45歳



その内、船の周りに人の頭が浮かんでいる様子が見え始めた
近くの浜にいる二人の漁師に大声で呼びかける

大上

おい、誰か……誰か、一緒に助けに行ってくれ。

漁師1

そんな……、わしらまでやられるぞ。危ないから、やめんか。

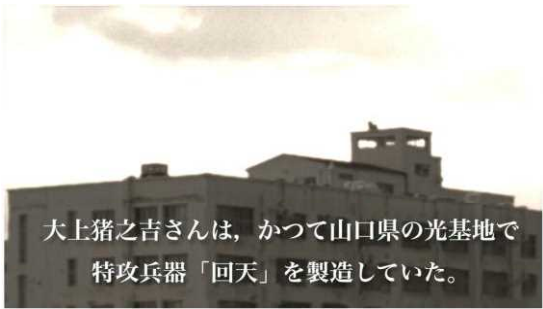
大上

ああ、それはそうだが……。



大上さんの心によみがえる回想シーン

以前、山口県光海軍工廠で特攻兵器「回天」の製造に当たっていた大上さん
穏やかな笑顔で話しかける若い兵士の姿がよみがえってくる



大上猪之吉さんは、かつて山口県の光基地で
特攻兵器「回天」を製造していた。



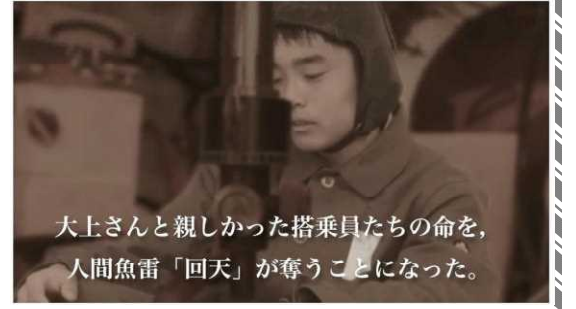
特攻兵器「回天」搭乗員



特攻兵器「回天」搭乗員



特攻兵器「回天」搭乗員



大上さんと親しかった搭乗員たちの命を、
人間魚雷「回天」が奪うことになった。

大上

いや……。俺たちが行ったら、兵隊さん達が1人でも2人でも助かるじゃないか。なあ、考え直してくれ。やっぱり助けに行こう。

漁師1

……なあ、どうする。

漁師2

……よし。今、俺たちが助けないと、みんな溺れて死んでしまう。舟を出そう。

漁師1

そうか……。分かった。よし、行くか。



鳴門海峡洋上
小舟の上の3人



漁師1

おい、あそこにいるぞ。

漁師2

よし、分かった。

大上さん、潮に流されている
兵士を舟に引き上げる
ぐったりしている予科練生



漁師2

おい……おい、しっかりしろ。

予科練6

はい。……あ、ありがとうございます。

漁師1

この子は……、まだ中学生ぐらいだぞ。

大上

ああ、予科練の制服だ。山口県の光基地で見たことがある。とにかく、水を吐かせるんだ。

漁師2

分かった。

周りを見渡すと他にも流されている人がいる
漁師3人がかりで引き上げても、ひどく重かった



漁師2

どうする。この舟じゃ3人乗せるのが精一杯だ。

漁師1

おい、見ろ。

大上

あつ。



米戦闘機が進路を変えて、速度を落として、真っ直ぐこちらに向かって来る

大上

おい、こっちに向かって来るぞ。

漁師1

なあ……俺たち、ここで死ぬのか。おい、タバコ持っているか。

漁師2

ああ、どうやら……これで吸い納めらしいな。

大上

おい、だめだ。……だめだ、諦めるな。みんな手を振れ。

大上さん、帽子を外して、思いっきりふる。

大上

おーい、撃つな。まだ子どもだ。

漁師2

俺たちを殺すことに何の意味があるんだ。

漁師1

撃たないでくれ。この子たちを助けてるんだぞ。



3人で必死になって手を振り続ける
米戦闘機は攻撃を中止、そのまま上空を通り過ぎた

漁師3人 その場に、力なく座り込む

大上

助かった……。

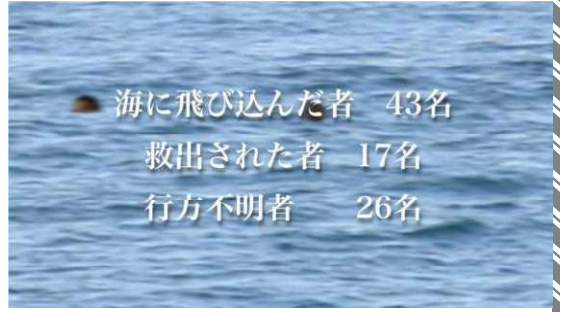


漁師2

おい、見ろ。船が来たぞ。皆が助けに来たんだ。

漁師1

海に浮かぶ人影に向かっておい、もう少しだ。頑張れ。



鳴門の漁港から、他の漁船が近づいて来るの見える
洋上で漁師が救出した者17名 自力で泳ぎついた者2名

淡路島からも救助の漁船が、住吉丸に近づいてくる

ナレーション(大島正純さん)

この時、助かった仲間は、四国側へと押し流されていたらしく、鳴門側の漁船に助けられました。敵機が飛び交う中で私たちの救出を決心し、危険を顧みずに船を出したのです。

船上に残っていた私たちは淡路島側の漁師が助けに来てくれました。

淡路島側の漁師1

よし、そこからこっちに飛び降りろ

大島

あの……体がまともに動かないんです

淡路島側の漁師2

そのまま、落ちてこい。こっちで必ず受け止めるから。



ナレーション(大島正純さん)

甲板に残っていた私は、重傷のため意識が朦朧としており、体を動かすこともやっとの状態でした。住吉丸からすべり落ちるようにして、船を寄せてきた漁師に受け止めてもらったのです。私たちを救ってくださったのは、淡路島側の漁師の方でした。

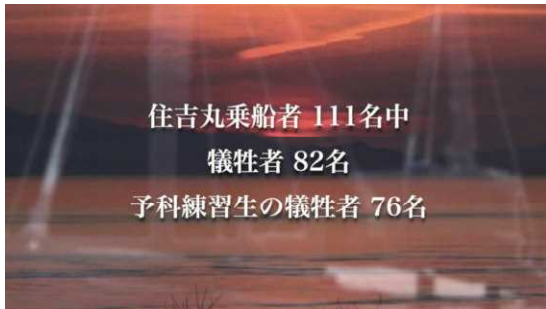
この時、船に残っていたのは8人、その中で、どうやら私が最も重傷だったようです。

被弾し、破壊された住吉丸は、日暮れ時に阿那賀の人たちに、春日神社の横にある浜まで曳航されました。そしてその夜、船内で亡くなった仲間の遺体56体は、阿那賀にある春日寺の境内まで運ばれたのです。ただ火葬にするためには火を燃やさねばならず、そうすると再び米軍機の攻撃対象にされる可能性があります。翌8月3日に葬儀が行われ、鳴門海峡に面した崖に10カ所ほど穴を掘り、そこに埋葬されたのです。

引率した士官2名と下士官2名、予科練習生76名、船員2名、計82名が犠牲になりました。

行方不明者はその内、26名。鳴門海峡の洋上で命を失ったものと思われます。

戦後70年以上が過ぎても……今も私の脳裏に焼き付いています。



※大島さんは、奥様、お孫さんと共に毎年8月2日には、淡路島の「鎧崎桜ヶ丘英霊墓地」にある82名の犠牲者へのお墓参りを続けている